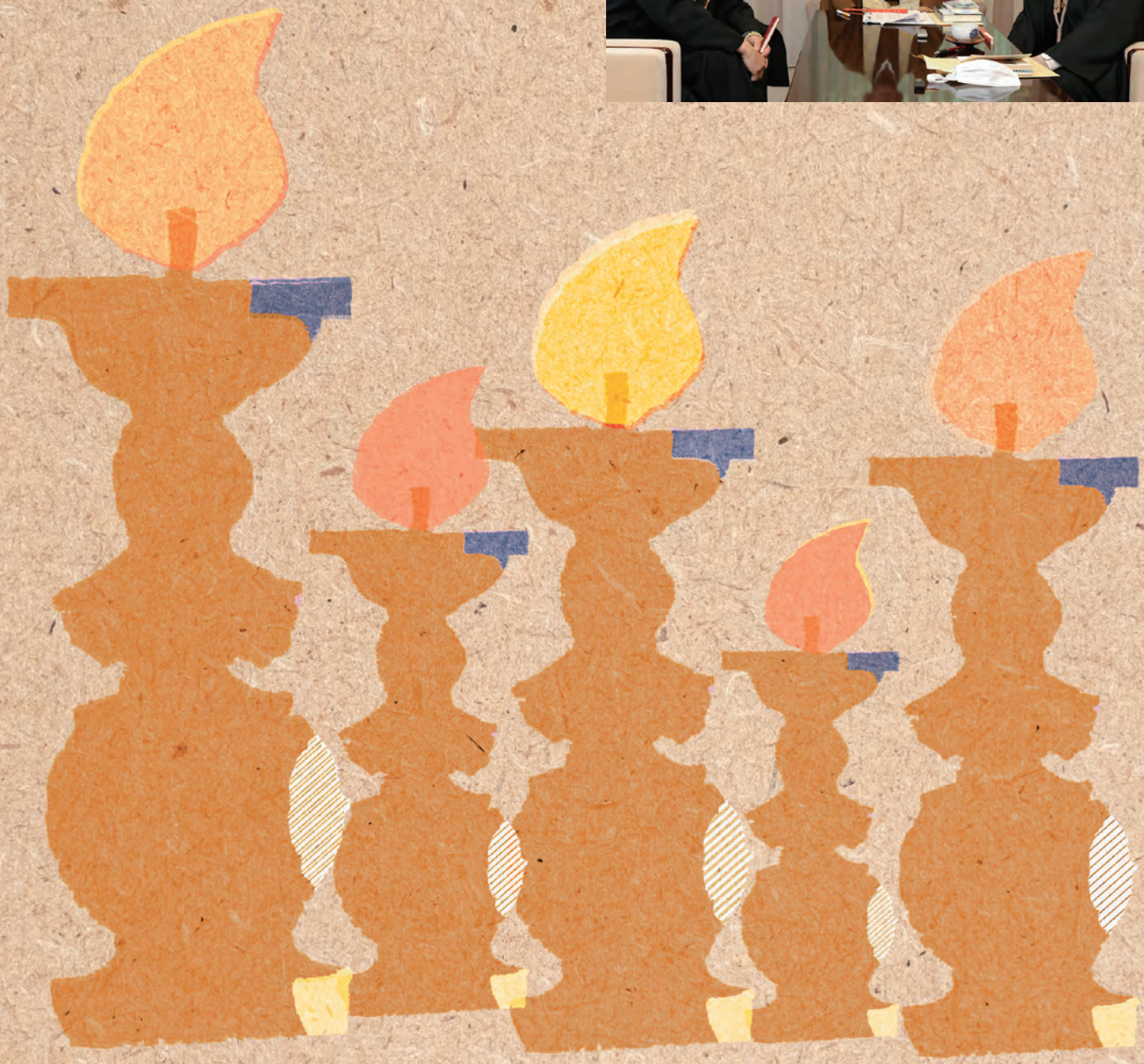
Dāna

ダーナ

ダーナ／第40号
発行日／令和5年1月25日
発行人／廣瀬卓爾
編集・発行／浄土宗平和協会

「ダーナ」とは
サンスクリット語で「布施」の意

VOL. 40



Jodo Shu Peace Association

浄土宗平和協会令和4年度

ブックギフト

令和４年度のブックギフトは、宮城・東京・名古屋・京都の４会場で開催しました。

本協会が実施しているブックギフトとは、支援事業の一つで、日本に在住する私費留学生に対して、個々の学生の専攻に合わせた専門書籍を贈呈（プレゼント）している事業である。

応募者が提出する小論文及び希望図書の審査を経て、被贈呈者を選定する。ちなみに本年度の小論文テーマは「留学生の世界平和に果たす役割」であった。４７名の留学生に希望した図書が手渡された。

各会場では、会所をお引き受けいただいた寺院のお上人方に勤行･法要などをお勤めいただき、出席した留学生には、厳粛な雰囲気を体験した喜びがあらわれていた。

法要終了後、各寺院ご住職より当日出席した留学生に希望図書が手渡され、留学生からは図書の贈呈や、会所の気持ちのこもったおもてなしに対する感謝の気持ちが述べられた。

またそれぞれの会場では、数珠繰り、抹茶接待、茶話会など、それぞれに工夫を凝らした時間がもたれ終始和やかに開催できた。これもひとえに会所皆様方のご協力の賜物と感謝している。

令和５年度のブックギフトも宮城・東京・名古屋・京都・福岡の５会場で開催する予定である。

一人でも多くの留学生がブックギフトに応募し、また当会会員の皆様にも授与式に参加いただき、共生の精神に満ちた世界を謳う本事業の主旨が広まることを願っている。

名古屋会場

東京会場

京都会場の大本山百万遍知恩寺での模様

INDEX

ブックギフト開催報告／「念仏誓願の集い」東北大会開催報告／ FEATURE **《特集》開宗８５０年記念・ダーナ鼎談／**
COMPETITION **第４回平和作文コンクール／** COLUMN **《コラム》長野教区法光寺 小口秀孝、九州教区一心寺 永江憲昭／**
PRIZEWINNER **令和３年度 浄土宗平和賞受賞者／** COMMITTEE **浄土宗平和協会「専門委員会」／** INFORMATION **コラム兵戈無用、編集後記ほか**

浄土宗平和協会 浄土宗開宗850年記念事業

浄土宗平和誓願の集い

《第一回 東北地区大会開催》

法然上人が浄土宗を開宗されて以来、令和６年には８５０年目を迎える。この佳辰にあたり、本協会ではさらなる歩みを進めるため、全国各地区において「浄土宗平和誓願の集い」を開催する方針を決め、記念すべき第一回を令和４年６月２４日に宮城教区愚鈍院様の全面的なご協力を得て開催した。

第一部の平和誓願法要は、協会会長である宗務総長川中光教師が導師を務め、脇導師は宮城教区長中村瑞貴師・同教区教化団長眞賀部道賢師に務めて頂き、また教区内寺院からの随喜上人、宮城教区の吉水講講員、東北地区の檀信徒など、多くの方々のご協力を得て厳修した。

続いて、令和３年度の浄土宗平和賞の授賞式を執り行い、アジア圏（タイ、ラオス、スリランカ）の子ども達への教育支援や女性に対しての自立支援を目的に４０年近くに亘り活動されている茨城教区大楽寺寺庭婦人の長谷川典子さんに賞状と副賞目録が授与された。

第二部の記念講演では、佛教大学名誉教授で、戦時資料委員会の委員でもある原田敬一氏を講師にお招きし「東北の近代と戦争」を講題とするご講演を頂いた。

【第二回浄土宗平和誓願の集いのご案内】

◆北陸地区で開催

日　時　令和５年６月23日(金)14時から

場　所　石川教区 浅野川組 №21 如来寺
石川県金沢市小立野五丁目1番15号
TEL076-221-0833

法　要　平和誓願法要

記念講演　バンドゥーラ演奏とお話
（ウクライナ出身 カテリーナ・グジーさん）

パネル展を見る川中宗務総長（右）と廣瀬理事長

特 集　開宗850年記念・ダーナ鼎談

混迷の時代、「念仏者」の貢献とは
― 平和を願う思いを実践へ ―

浄土宗平和協会（JPA）の広報誌「Dana（ダーナ）」は本号から、従来の装いを一新し年１回の刊行として再スタートします。会員だけでなく、一般の人にも興味を持って読んでいただけるよう内容を改めました。そして新誌面の記念として、協会の総裁でもある浄土門主 伊藤唯眞猊下と、協会会長の川中光教宗務総長をお迎えし、廣瀬卓爾理事長を加えての大型鼎談を開催することとなりました。ロシアによるウクライナ侵攻が長期化する中、「平和の意味とは」「念仏者としてわれわれに何ができるか」「若い世代の育成」などについて、真摯な議論が交わされました。導き出された大胆で率直な提言は、令和6（2024）年に控えた浄土宗開宗850年慶讃事業のあり方にも、大きなヒントとなるはずです。

左より協会会長 川中光教宗務総長、浄土門主 伊藤唯眞猊下、廣瀬卓爾理事長

平和のイメージは「明るさ」「自由」

―― 廣瀬でございます。伊藤ご門主、川中総長におかれましては、普段から浄平協の活動をさまざまな形でお支えいただき、ありがとうございます。浄平協は発足以来、平和に関連したNGOやNPOへの支援、浄土宗平和賞の授与、ブック・ギフトなどの事業を進めています。また4年前からは、浄土宗がアジア太平洋戦争にどう関わっていたのかを

検証するため、戦時下に宗派が公刊した諸資料の収集を行っております。また各寺院が保管されている当時の文物の情報提供を受け収録作業などもいたしております。浄土宗開宗850年も間近に迫ったいま、協会の志向すべき道を見出すべく、そのヒントを得るためにもどうか忌憚のないご意見を頂戴できればと願っております。それでは最初に、お二人が抱いておられる「平和」という言葉に対するイメージをお聞かせください。

伊藤門主　「私は１５歳のとき、終戦を迎えました。ちょうど宗祖法然上人が比叡山で出家された年齢ですね。アジア太平洋戦争、当時は大東亜戦争と呼んでおりましたけれど、戦争が終わったことを実感したのは、明るさです。戦時中は夜間、米軍の空襲を避けるため厳しい灯火管制が敷かれていたのが、もう必要がなくなった。それまでの社会のさまざまな価値観が転換し、食糧難のためひもじい思いもあったけれど、心の中に明るさが戻ってきたという点で、大きな喜びを感じました」

川中総長　「私は昭和２５年生まれですので、直接に戦争を体験してはおりません。それでも、師僧だった父親が学徒出陣していて、戦時中のことはよく話してくれました。そんな私の平和のイメージといえば、家族が一日の仕事や学校を終え、揃って食卓を囲み団らんしている姿です。さらにもうひとつ加えるなら、自分で感じたこと、考えたことを自由に発言したり発表できたりすることも、平和という言葉には込められていると思います」

宗門の「戦争責任」を検証する

―― 私も終戦の年に生まれましたから、戦争は知りません。お二人の話をうかがっても、世代によって戦争をどう受け止めるかは、微妙に異なっていることが分かります。さてここからは本題に入りたいのですが、ご門主は「Dana」36号（令和２年８月発行）に寄せられた玉稿「不戦、非暴力を誓いて」の中で、浄平協が浄土宗総合研究所とともに進めている「浄土宗内の戦争責任の歴史的検証」を、積極的に評価されておられます。それだけでなく、ご自身がお持ちの資料も提供され、とりわけ日清戦争開戦時に当時の浄土宗管長、日野霊瑞師（1818～96）が檀信徒に向けて発表した『報恩教話』（ほうおんきょうわ）を紹介されました。

伊藤門主　「あれは東日本大震災（平成２３年３月１１日）が発生し、私が被災地を慰問させていただいたときに、ある浄土宗寺院の住職を通じて手渡されたものなのです。浄土宗の戦争責任というと、アジア太平洋戦争下に宗派がどう国家に協力していったかに焦点が当てられますが、私はさらにさかのぼって明治の日清、日露戦争の時期も見落とせないと考えています。その点、『報恩教話』は重要な資料で、日野師は『天皇の恩に報いるには、臣下は身命を惜しまず忠義の誠を捧げるべき』などと諭しています。こうした歴史的事実は宗内でもほとんど知られておらず、私も初めて目にしたので、衝撃を受けました」

『報恩教話』の衝撃

――『報恩教話』は、日清戦争が始まった2カ月後の明治27（1894）年10月、浄土宗内に設けられた臨時賑恤（しんじゅつ）部から出版された小冊子です。コンパクトなので、出征兵士が常時身に着ける携帯用だったと思われます。文章は平易ですが、見逃せないのは、念仏者として阿弥陀仏への信仰を説く中で、「尽忠報国」「兵馬奉公」などと重ねられていることです。「忠孝仁義の道はまた菩薩の行いなり」ともあって、これだと戦争に行って手柄を立てることを奨励するばかりか、「天皇のために戦地に赴くことが、阿弥陀仏の教え」という論理にもなりかねません。

伊藤門主　「日清戦争の時代の日本といえば、明治維新から30年近くが経過し、欧米先進諸国に追いつくため帝国主義的な動きを強め、国力を蓄え軍備を強化してゆく時期だったのです。多くの仏教教団も政治に従属し、軍資金を献納したり、従軍布教にあたったり、軍隊を慰問したりして協力する。日野師の言動もそうした延長線上にあったわけです。極めて残念なことですが、ただ一点、わずかな救いがあるとすれば、まず仏教徒・念仏者としての自覚を深く持てと諭していることです。これがもっと後の時代になれば、仏教が戦争目的のためだけに使われる状態になるのでしょうが」

――確かに、仏法僧への帰依（三帰依）を表明する「三帰三竟（さんきさんきょう）」を唱えることを求めるなど、仏教者としての自覚を重視しています。しかし実際の戦場で敵兵を殺すなら、仏教が何より大切にしている「不殺生戒」（命を奪ってはならないという戒め）や慈悲の教えと矛盾してしまいます。「戦争で殺戮を行っても、阿弥陀仏はすべてを許し摂取（救済）してくれるのだから、安心して戦え」という論理なのでしょうか。

伊藤門主　「法然上人はいわゆる源平争乱の時代を生きた人ですから、弟子たちの中にも（熊谷直実や宇都宮頼綱、甘糟忠綱のような）武士がいた。上人は殺生を生業とする彼らの悩みにこたえ、念仏による極楽往生を説いておられます。しかしそれは、決して戦争や殺戮を肯定しているのではない。安心して戦場に赴けとは、決して言えないでしょう」

――総長は『報恩教話』のことをご存じでしたか。

川中総長　「まったく知りませんでした。しかし、本当にすごい資料ですね。日清戦争の始まりとともに、こうしたものが出されていたとは…。また宗門内に、臨時賑恤部のような組織が特設されていたことにも驚かされます。こういう発見があるのだから、戦争責任の歴史的検証は、どんなに手間や時間がかかってもやりとげねばならない宿題だと感じます」

伊藤門主　「これは偶然なのですが、日本史の大きな流れで見ると、今年（２０２２年）はアジア太平洋戦争の終結から７７年目にあたります。そして、ちょうどその７７年前に明治新政府が成立している。つまり明治維新によってわが国が近代国家になって１５０年余りたっているうち、前半は天皇中心主義の国であり、後半は民主主義の国になっているわけです。いま私たちはこうした歴史を改めてかみしめ、未来の進むべき道を考えてゆく必要があるのではないでしょうか」

「怨（うら）みの連鎖」を絶つ

―― 振り返れば、終戦こそが現在に至る日本近代史の折り返し点だったわけですね。そして問われているのは、これからわれわれはどうするのかということなのでしょう。川中総長は「Dana」39号（令和4年2月発行）へのご寄稿「平和を願い伝える」で、「世界史も日本史も人間同士の争いの歴史だった」と書かれました。そして、法然上人の出家の契機にふれ、明石定明（あかしさだあきら）の夜襲に遭った父・漆間時国（うるまのときくに）公が亡くなる直前、上人に仇討ちを断念するよう諭し、僧となって父の菩提を弔うよう勧めたエピソードの意義を強調されました。

川中総長　「時国公は、美作国（みまさかのくに、岡山県）で地域の治安維持にあたる押領使（おうりょうし）と呼ばれる武士だったとされています。法然上人は武士の息子ですから、親の仇を討つことこそ何よりの親孝行だった。しかし時国公は、わが子が仇を討てば今度は仇の息子が復讐に立ち上がると考え、釈尊の『もろもろの怨みは怨み返さないことによって鎮まる』という言葉（法句経）を引用して戒めた。地方の小豪族クラスの人物にどれほどの仏教的知識があったかは分かりませんが、時国公は怨みの連鎖から息子を救い出すために仇討ちを禁じたのではないでしょうか。そして浄土宗の平和への思いに対する原点も、ここにあると私は考えています」

―― これも総長のご指摘ですが、浄土宗の7000余りの寺院の半数以上は西暦1469年から1643年の間に創建、または中興されているそうです。つまり、応仁の乱から戦国時代を経て豊臣氏の滅亡、江戸幕府の草創、島原の乱にかけての時期です。打ち続く戦乱が影響して、浄土宗寺院が増加していったとのご見解ですね。

川中総長　「家族や友人知人の死を悼み、供養するのは人間の自然な感情に基づく行為ですが、亡くなった原因が戦争の場合はさらにその思いが強まったのではないでしょうか。多くの人々が戦場で倒れ、死んでゆく悲劇が繰り返され、犠牲者を弔うとともに戦いのない時代の到来を必死に願ったのだと思います。もともと浄土宗には『怨親（おんしん）平等』（戦場で死んだ敵味方の霊をともに供養し、恩讐を超えて平等に極楽往生させること）の思想が強く、それもあって浄土宗寺院が増えていったのでしょう」

戦争犠牲者への視線

―― 次のテーマに移りましょう。私たち念仏者の「平和」への取り組みへの課題についてうかがいます。現代の浄土宗の僧侶や檀信徒を見ていますと、社会への働きかけ、社会貢献に関してはかなり積極的な面が見受けられます。ところが一方で、平和に対する関心は薄いように思えます。特に若い世代ですね。先ほどから議論している戦時資料の収集についても、「いまさら、そんなことが必要なの?」といった声すら聞きます。

川中総長　「日本の場合、幸いなことに平和な状態が長く続き、若い世代がそれを当たり前と考えていることが大きいと思いますね。戦争の悲惨さ、非人道性は決して風化させてはならないものです。しかし、日本人のうち戦前生まれがすでに2割を切っていて、戦争体験者はますます少なくなっていく。だからこそ、日本の平和と繁栄は戦争に駆り立てられ亡くなった方々の尊い犠牲の上に成り立っていることに、改めて思いをいたさねばなりません」

―― 浄平協の主要事業の一つに高校生を対象にした平和作文コンクールがあるのですが、「家族みんなで団らんをしたり、朝食で温かい味噌汁を食べられるといった、何でもない日常を暮らすことができることに平和を感じる」といった作品が多く、高校生だけでなく若手僧侶にもこのような受け止め方をしている人は少なくありません。そのような考え全体を否定するわけではないのですが、例えば釈迦の弟子と論争を繰り広げた在家の仏教者・維摩（ゆいま）居士のことばに「衆生が病む。ゆえにわれも病む」とありますが、私はそれを時代や社会への深い共感だと受け止めています。現代は維摩の時代以上の混迷の時代といえますが、こうした共感はもはや望むべくもないのでしょうか。

川中総長　「社会に積極的にかかわることは大切なことで、維摩の共感は仏教者としての理想でもあります。しかしそうした一方で、社会的、政治的課題に対しては、宗派・宗門としてまとまって動くのはなかなか難しい。いま世界中の人々が心を痛めているロシアによるウクライナ侵攻については、始まって間もない3月、浄土宗としてロシアの武力行使に反対する声明を出し、浄平協を窓口にした募金も実施しています。しかし、例えば核兵器による抑止力を認めるかどうか、また原子力発電の是非などになると、宗内においても考えが異なり、ひとつにまとめるのは簡単ではありません」

―― 死刑の是非もそうですね。死刑制度の廃止を求めている既成仏教教団もありますが、私たち浄土宗はまとまっていません。ただし、先進国の大半が死刑制度を廃止していますし、冤罪だった場合には取り返しがつかないという問題があります。何より、国家が人の命を奪っていいものかという議論も存在します。

川中総長　「おっしゃるように問題点はいろいろ挙げられているけれど、教団としてはいまだ発言する段階に至っていないということです」

―― ご門主は宗政から離れた立場ですので、少し自由にお考えを表明できるのではありませんか。

伊藤門主　「課題から逃げているわけではありませんが、浄土門主として発言するときには、やはりあれこれ気を使います。何より宗派には多くの組織が存在して、それぞれの課題について専門的に議論を進めている。私は議論の深まりを信頼し、見守っているのです。それぞれの組織は宗門内外の組織も含めてよく連携を取り合い、最善の結論に到達してほしいというのが私の願いです。ただ死刑の問題に関連していえば、命の大切さという点を念仏者として重視してほしいと思っています」

平和とは「いのち」の問題

――さて、宗門にとって極めて重要な課題である、若い世代をどう育てるのかについてうかがいます。宗教教育というと、私には常に頭に浮かぶ一文があります。戦前、反戦平和運動を進めたとして治安維持法違反で逮捕された林霊法台下（1906～2000、大本山百萬遍知恩寺法主）の著書『釈尊出現の意義と浄土教』の中の一文です。「いわゆる宗教教育などというものは、特定の宗教の時間を設けて無味乾燥な仏教の専門用語の説明をするようなことであってはなるまい。教師自身がまず仏教的な世界観なり人生観に主体的に生きていくことである。学生生徒の交流を通して、宗教的人間の息吹というものが、おのずからに若い魂の中に尊いものを与えていくことになる」というものですが、果たして私たち浄土宗の宗門校でそのような教育が行われているでしょうか。

川中総長　「実に耳の痛い批判ですね。言い訳めいて受け取られるかも知れませんが、私は浄土宗の教学局長だったとき、宗門校の学生生徒向けの副読本『仏教読本』を改訂したのです。従来のものがあまりに堅苦しいと不評だったので、若い世代にもアピールするように読みやすくし、雑学的な要素も加えました。その結果、学生生徒だけでなく、ご家族まで目を通してもらえたというう れしい報告を聞くことができました。しかしまだまだ不十分で、次に改訂するときは、平和への取り組みといったテーマも加えなくてはなりませんね。浄土宗開宗８５０年のキャッチコピーは『お念佛からはじまる幸せ』ですが、若い世代の育成教化をはかる機会にしなければなりません」

―― 最後にご門主にうかがいます。先ほどの「いのちの大切さ」についてですが、実際にどのように教えてゆけばいいのでしょう。

伊藤門主　「いのちの問題はすべての根本です。法然上人も一番大事なのはいのち、とおっしゃっておられますから。現代社会の中でもう一度、不殺生戒の意味とその重さを訴えなければいけません。『平和とはいのちの問題である』ということが大事です。その点で、私たち宗教者の使命は非常に大きいといえます。それも狭い枠に閉じこもるのではなく、幅広い議論や対話を通じて広め実践へとつなげてゆかなくてはならない。若い世代に、もっと寺院を訪れてもらうことも一つの契機となるでしょうね」

―― 残念ながら、予定の時間となりました。まだまだ議論し残した点もありますが、このあたりで。貴重なご意見は今後、協会の活動にいかしてまいります。今日はどうも、ありがとうございました。

※日野霊瑞（ひの・れいずい、1818～1896）　幕末から明治にかけての浄土宗の僧侶。松代藩（長野県）の郷士の家に生まれ、増上寺に入る。京都で修学中、大納言・日野資愛（すけなる）の猶子（ゆうし、仮の息子）となり、明治９（１８７６）年、増上寺住職、浄土宗管長に就任した。日清戦争が起こると、一宗を挙げて国家への協力を主導した。

※林霊法（はやし・れいほう、1906 ～ 2000）　仏教界の覚醒と反戦平和の運動を続ける。浄土宗立東海高等学校校長、東海学園女子短大学長。１９９４年浄土宗大本山百萬遍知恩寺法主。著書に「法然上人の生涯と信仰」、「妹尾義郎と新興仏教青年同盟」などがある。

鼎談開催日：令和４年１１月１８日
ところ：総本山知恩院 門跡応接室

浄土宗平和協会
第4回作文コンクール受賞者の報告

廣瀬卓爾理事長、井上貴仁さん、田中裕史上宮学園理事長

令和４年度の第４回平和作文コンクールは、宗門高校１７校のうち７校（京都文教高等学校・上宮太子高等学校・東海高等学校・淑徳高等学校・上宮高等学校・樹徳高等学校・真和高等学校）から５２７作品の応募をいただきました。

厳正なる審査の結果、下記の表彰対象者５名及び学校賞１校を決定いたしました。

なお、総裁賞に輝いた作品を掲載しましたのでご一読ください。

記

《 各賞及び受賞者 》

総裁賞	上宮高等学校３年	井上 貴仁
副総裁賞	東海高等学校１年	平澤 邦太
副総裁賞	真和高等学校２年	権藤 向葵
会長賞	真和高等学校２年	仲田 怜奈
理事長賞	真和高等学校２年	橋本 結依
学校賞	真和高等学校	

出会った言葉をメモする楽しさ　総裁賞を受賞した井上貴仁さんと廣瀬理事長のインタビューから

廣瀬：書き出しからテンポと言うか、リズム感のある展開で、引き込まれる筆致に感心しました。じつに上手い。さて二つのことをお尋ねします。一つは、広島原爆資料館に展示されているモニュメントの言葉や、映画「ジュラシックパーク」のセリフの一部を引用されていますが、その時々に触れた言葉を記憶に残すのは難しいことですが、何か良い方法がありますか？

井上：私は、胸に刺さるような言葉とか、心にとどめておきたいと感じた言葉に出会ったときは、すぐに携帯電話やノートにメモるようにしています。

廣瀬：なるほどね。私のような世代には携帯電話にメモるって発想が思い浮かばないし、記憶そのものが不確かで、後になって困ることがよくあります。良いことを教えていただきました。

二つめは、「欲が争いを生み、平和が失われるのだ」と述べていますが、このような考え方を持つにいたったきっかけについて教えてください。

井上：学校の宗教の授業で仏教用語について学びましたが、たしか【三毒】という用語に触れたときだと思います。また小さいころから広島出身の母からは原爆の話、父方の祖父からは戦時中の話をよく聞いていたこともあり、僕の中には、一時的な欲が生み出す悲惨な結果という言葉が常にあるのです。

廣瀬：先ほど、折々に感銘を受けた言葉は記録するよう心がけていると話されましたが、書くという行為にとても意欲的で、独自の文書作法を持っているように感じます。どのようなテーマについても、数々の言葉が詰まったファイルからもっとも適した言葉やフレーズあるいは考えなどをごく自然に選び出し、練り上げた構成に落とし込んで書いているのですね。

井上：その通りです。楽しいですよ。それらとテーマとの連動性というか相性がピタッと合うときは本当に楽しいです。

私の平和

上宮高等学校三年　井上 貴仁

八月六日八時十五分。私は今年も黙祷を捧げた。そして例年通り今年も平和について考えた。

私は幼少期より広島県出身の母親や祖母から、八月六日の広島について、毎年八月六日には必ず聞かされてきた。その当時の記憶や先代から語り継がれてきた原爆や戦争に対する思い、またそれらを通した上での広島県民としての思い等を聞かされた。それらの内容は、私が今まで観てきたどんな創作物よりも恐ろしく生々しいものであり、耳を塞ぎたくなる内容や怒りを覚えるものを含んでいる。この話を聞いた際や思い返す際に私は、一時的な感情から「やり返すべきだ」と考える。

しかし最終的に私は「やり返してはいけない」「戦争はしてはいけないものなんだから」と必ず結論づける。なぜなら、そこにはいつもとある文章が絶体的な概念として私に存在しているからだ。それは、「こんな思いを他の誰にもさせてはならない。憎しみや拒絶を乗り越え紡ぎ出した答えです。」というものだ。

これは広島原爆資料館に展示されているものの一部である。この文章から私は実に生々しく現実味のあるなにかを読みとった。そのなにかには異論をよせつけない力がある。だからこそ私の中に一つの絶体的な概念としてその文章は存在する。そしてこの概念が私に存在することで私の考えはいつも同じ結論となる。

ここで話を終わらすことなく、私は更に視野を広げて話をしたい。原爆は、科学者が発見した仕組みを権力者が利用し、作ったものだ。要は、人間の一時的な欲が原因なのだ。この人間の欲に対する同様の意見は様々な形で教訓として語られてきた。その中でも特に私が好きな形で語られたのが、映画「ジュラシックパーク」だ。この映画の中で、とある博士がこう述べる。「出来るかどうかってことに心を奪われて、すべきかどうかは考えなかった。」私はこの言葉が、物を造ることによってのみでしか進化出来ない現代の人類やこうしたいああしたいという欲にのみ突き動かされて生きている人類全てを言い表している様に思う。そしてこの言葉をこれからの時代を生きていく人類全ての共通概念として共有していくことが必要だと考える。

ここまで長々と原爆について述べてきたが、まとめるとこうだ。私は単に原爆が悪い、戦争はしてはいけないと述べてきた訳ではない。人間が後先を考えずに一時的な欲で動いてきたからこそ戦争の様な取り返しのつかないことが起こってしまい、平和が失われたのだと述べたい。だからこそ私はこれからの平和な未来を作っていく人間として、時に後ろ（歴史や教訓）を向き、そこで得た知見を私に周りの人間がしてくれたように、後世へと引き継いでいく。

戦争のない平和な世界の実現に向けて

浄土宗平和協会理事 長野教区法光寺　小口 秀孝

浄土宗平和協会は「国際平和への貢献」という理念のもと「社会参加する仏教」を志向し、浄土宗唯一の平和団体として設立され、現在まで幅広い分野で平和貢献活動を展開してきています。

当協会の最近の活動として、若い世代を対象に「平和」をテーマに作文コンクールを実施し、平和に対する意識の醸成に取り組んでいます。戦後７７年、戦争を知る世代が減少する中で、これからの子供たちに戦争や平和への思いについて真剣に考える機会を提供するという点で大切な活動の一つであると思います。

振り返れば、私自身かつて地方公務員として中学生の平和教育についての仕事を担当したことがあります。毎年、市内の中学校を対象に「校内原爆パネル展の巡回」「生徒のお母さんたちによる原爆朗読劇の口演」「平和作文コンクールの実施」「広島原爆の日･平和祈念式典への参加」「被爆体験の語り部との交流」「入賞作文集の発行」等の事業を実施し、一般市民や他市町村にまで活動の輪が広がるほどの大きな成果となりました。これらの事業を発端として「原爆の火」を所有されている福岡県星野村から分火をお願いし、地球上の平和を願う市民の募金を基に「原爆の火・平和の塔」を設置し、毎年８月６日には平和祈念式が行われ核兵器廃絶の日まで絶やすことなく灯し続けられています。

もう一つ、４０年程前に社会教育主事としてかかわった婦人会活動の中で、戦前・戦中・戦後の苦しい、厳しい生活を耐え忍び激動する時代を生き抜いてきた女性たちの戦争体験の記憶を記録にしました。語り尽くせない多くの犠牲の上に得られた平和を生き、戦争は二度としてはならないという決意、生命を生み育てる女性の魂の叫びを文集にして後世に語り継ぐために「あしたを拓く女たち」というタイトルを付けて発刊し、各方面から反響をいただいことが今でも思い出されます。

２０２２年の今年の漢字は「戦」です。特にロシアによるウクライナ侵攻戦争の惨禍が続く中、この地球から戦争をなくし、平和な世界をつくることは全世界の人々の共通の願いです。戦後７７年、今国内では「非核三原則」「憲法９条」「防衛増税」といった平和を考える上で重要な課題が取り沙汰されています。昨今の当協会の活動として戦時資料を収集し、歴史的検証を加えて次世代に継承していく作業が進められてきました。宗祖法然上人の生き方、み教えを体して、非戦・非核武装を誓い、未来に向かって慈しみにあふれた共生・平和の社会の実現のために、先ず自分から行動することが大切であると思います。

平和協会の活動と平和について

浄土宗平和協会理事 福岡教区一心寺　永江 憲昭

浄土宗平和協会は令和３年１２月に設立３０周年の記念大会を京都で行った。過去から蓄積され引き継がれた協会の有意義な活動は、NGO や NPO 支援事業・ブックギフト・浄土宗平和賞・平和作文コンクール・機関紙発行・平和念仏募金等々多岐に亘っている。平成３０年に理事に加えて頂いたが、未だに活動全体を把握出来ていないのが現状である。

令和２年からはブックギフト事業を担当することになった。この活動はそれまで関東・東海・関西を中心に毎年１００名前後の私費留学生に、修学のための専門図書を贈呈し感謝をされてきたが、さらに東北・九州地区に活動を広げることになり、担当地区の福岡市内の大学や専門学校・国際交流センターに趣意書を配り活動内容を説明して巡ったが、初年度は1人、2年目は2人、令和4年の参加者は皆無だった。参加者を募るのは中々難しい。宗教関係の活動と云うだけで相手にされない場合もあった。来年はもう少し丁寧に説明するとともに留学生交流イベントにも出かけようと思っている。

対外的な平和活動としては核廃絶運動への協力があげられる。当協会はいち早く被爆者主催の「国際署名運動」に協力し、浄土宗をうごかして全日本仏教会に協力要請することにより、全日仏加盟５９宗派１０６団体が協力してくださった。令和元年には署名者が１０００万人を超え、翌年１０月にその「署名簿」が国連に提出された。その時まで「核兵器禁止条約」は、平成２９年７月に１２２ヶ国の賛成を得て採択されていたが、批准国が条約発効基準の50ヶ国に達していなかった。しかし、「署名簿」提出後の僅かな期間に５０ヶ国を超え、翌年１月２２日に「禁止条約」が発効した。そこには、署名活動に籠められた被爆者たちの願いが大きく影響したものと確信している。また、最近活動として注目すべきは、戦時史資料の分析である。７人の専門委員によって作業が進められている。まもなく報告書が出される予定である。

万人救済・生命尊重をテーゼとする仏教徒が、戦争・殺戮というアンチテーゼに飲み込まれた事実を咀嚼することで、真の平和というジンテーゼが導かれるかもしれない。

ところで、平和の概念規定は難しい。単に戦争や争いの無い状態であるとも言えない。また国家間の平和なら外交努力によって実現されるかもしれない。しかし戦争が無くなった国家が平和な時でも人々はストレスを抱え不安に陥ることもある。従って真の平和は我々一人ひとりの心が安定した状態をいうのかもしれない。もしそうだとすれば、天変地異や疫病・戦乱に明け暮れ、生き地獄を住処とした人々に南無阿弥陀仏の救済を説くことで心の安定に導いた法然上人の称名念仏の教えこそ真の平和をもたらすものである、と言える。合掌

PRIZEWINNER

令和３年度　浄土宗平和賞は
茨城教区寺庭婦人・長谷川典子さんに

仙台市・愚鈍院で開催された浄土宗平和誓願の集いのプログラムの一つとして、令和３年度浄土宗平和賞の表彰式が挙行された。今回の受賞者は、茨城教区絹組大楽寺（常総市水海道橋本町）の寺庭婦人である長谷川典子さんで、川中光教宗務総長（浄土宗平和協会会長）から表彰状と副賞の５０万円が授与された。

長谷川典子さんは、１９８５年東北タイの子ども達に絵本の移動文庫を始めたことから、その後ラオスへも支援を行い、貧困のために学校へ行けない子ども達への教育支援、学校建設、教師へのレベルアップの支援等を続けている。また、スリランカにおいては、仏教圏でありながら仏教の幼稚園や学校がなかったため、幼稚園、教員養成学校を設立し、日本の教育を取り入れたカリキュラムで進めている。さらに、女性の自立支援についても、現地の女性が作るクラフトの販売や、資格を得て教育機関に勤められるように尽力した。

「茨城アジア教育基金」を支える会に所属し、アジア圏の子ども達への教育支援や女性に対しての自立支援を目的に４０年近くに亘り活動を続けられている長谷川さんの功績が高く評価された。

COMMITTEE

浄土宗平和協会「専門委員会」

本協会は、浄土宗平和協会会則第１６条に基き専門委員会を組織している。

専門委員会は、本協会の目的並びに設置趣旨を理解し、かつ当該領域に専門的知見を有する者若干名が、理事会の了承を得て理事長が選任、委嘱する。

委員会活動の現状は、NGO／NPO団体支援の対象となる支援団体の選定、浄土宗平和賞の受賞対象候補者、団体の選定に関する調査並びに審査が主な役割であるが、SDGsに関する本協会の役割、あるいは戦争による難民や復興支援などについても検討している。

【委 員】（順不同・敬称略）

佛教大学	大谷栄一（佛教大学社会学部教授）
アーユス仏教国際協力ネットワーク	枝木美香（アーユス事務局長）
東京教区　№０３２　心光院	戸松義晴（浄土宗総合研究所）
東京教区　№４１１　蓮宝寺	小川有閑（大正大学地域構想研究所研究員）
奈良教区　№３１３　称念寺	伊藤茂樹（華頂短期大学准教授）

浄土宗「戦時資料」に関する委員会

浄土宗は2001年初頭に「愚者の自覚を、家庭にみ仏の光を、社会に慈しみを、世界に共生を」とする「21世紀劈頭宣言」を発表した。

この劈頭宣言の趣意文中に、「20世紀は人間の限りない可能性を信じた時代であった。科学技術の進歩、合理的思惟、それらは人間の生活や文化の領域を拡大してきた。しかし一方、恐るべき核兵器の開発、国家や民族間の対立、地球環境の破壊、人間の欲望の肥大、家庭の崩壊、道徳や教育の荒廃など負の遺産もまた生じた」との言葉があり、さらに「これらを引きつがざるをえない我々は、法然上人の説かれた『愚者の自覚』」に立ち返って、これを解決すべく平和、環境、倫理、教育、人権、福祉などの諸問題に取り組まなければならない」と宗祖法然上人の流れをくむ我々の歩むべき指針が述べられている。

また、平成20年（2008）11月に発表された「浄土宗平和アピール」には、「本宗の近代において、軍用機を陸海軍に献納するなど、様々な戦争協力の事実は否定することができません。これに対し、例えば1994年、浄土門主は『太平洋戦争五十回忌法要』表白において、戦役に助力した重責に対する懺悔、すべての戦没者の鎮魂・慰霊、世界平和への祈念を表明いたしました。わたしたちは、そのこころを受け、浄土宗が世法の国策に従いいかなる言動を行ってきたか、歴史的検証を行うことこそ、世界平和の実現に、あらためて必要なことだと確信します」と示されており、負の遺産とも呼ぶべき日清・日露戦争、第一次世界大戦、満洲事変、日中戦争、アジア・太平洋戦争に至るまでの浄土宗の動向の検証は大きな課題となって今日に至っている。戦時中の浄土宗の教化を詳らかにすることで、すべての浄土宗僧侶が「自省、懺悔」の念を起こし、これからの世界平和の実現に寄与する方途を考えなければならない。

このような考えに基づき、平成31年度より「浄土宗戦時資料に関する委員会」を設置し、当該領域に専門的知見と多くの研究業績を有する宗内外の研究者の参集を得て検討を進めている。

【委 員】（順不同・敬称略）

佛教大学	大谷栄一（佛教大学社会学部教授）	東京教区 №418 龍泉寺	武田道生（大正大学講師）
佛教大学	原田敬一（佛教大学名誉教授）	神奈川教区 №198 霊山寺	江島尚俊（大本山光明寺記主禅師研究所講師）
福島教区 №051 無能寺所属	赤坂明翔（無能寺所属教師）	三河教区 №002 普仙寺	加藤良光（宗議会議員）
千葉教区 №133 醫王寺	八木英哉（浄土宗総合研究所研究スタッフ）	尾張教区 №088 西方寺寺庭	深谷雅子（副理事長）
東京教区 №029 妙定院	小林惇道（淑徳大学等非常勤講師）	滋賀教区 №417 願海寺	廣瀬卓爾（理事長）
東京教区 №202 良感寺	宮入良光（浄土宗総合研究所研究員）	大阪教区 №237 慧光院	山北光彦（副理事長）

阿弥陀佛 供出（兵器の原料）第二次世界大戦下　昭和 17 年 1 月

INFORMATION

兵戈無用

浄土宗平和協会理事長　**廣瀬 卓爾**

デジデリウス・エラスムス（１６世紀―後期ルネサンスを代表する人文主義者１４６６－１５３６）の著書に『平和の訴え』という一冊がある。箕輪三郎氏の翻訳が岩波文庫に収められている。高校時代に世界史の先生から彼の『痴愚神礼賛』を薦められたが、実に愉快な諷刺作品でしばし時を忘れて読みふけった記憶がある。いま再読してもその痛快さは当時の読後感を上回るものがある。いや、こんにちでこそ我々が味わうべき一冊ではないかと思う。

さて、『平和の訴え』（１５１７年初版）の中でエラスムスは次の言葉を残している。

「聖職者たるものは、みな一様に気をあわせて、戦争反対の叫び声をあげねばなりません。公の席であろうと、また私的な場所であろうと、平和を説き、平和を讃え、平和を人びとの心の奥底にきざみこむべきです。よし武力による紛争の解決を阻止することができなくとも、決して戦争を是認したり戦争に参加したりすべきではありません。権威ある聖職者が列席することによって、甚だしく涜神的な、少なくともその疑いの濃い行事に栄誉を添えてはなりません。戦没した人たちには普通の墓所が与えられるだけで充分です。」

彼が生きた時代は５世紀も昔のルネサンス時代。当時と現代の社会的背景が異なることは言を俟たない。だが、この一文の重みは世紀を超えて色褪せず今の私たちに迫るものがある。

平和への揺るぎない実践こそが仏教徒であることの存在証明（レーゾンデートル）である。

平和念仏募金のご協力のお願い

平和念仏募金は、各 NGO や NPO 団体への援助、私費留学生に希望図書を贈呈するブック・ギフト活動、浄土宗平和賞などの活動に充てられます。何とぞご協力賜りますようお願い申しあげます。

◆①世界の人々に役立つ、②共に学びあう、③社会にアピールする、④新たな人材を発掘・養成する―との方針のもと、NGO や NPO を支援しております。

◆私費留学生希望図書購入支援「ブックギフト」事業を行い、留学生の勉学支援をしています。

入会要項

浄土宗平和協会の活動にあなたも参加しませんか？

正会員

対象…浄土宗教師・寺族
会員…年間 10,000 円

賛助会員

対象…檀信徒、企業や宗教法人以外の団体
会員…檀信徒会員年間 2,000 円
　　法人会員年間 10,000 円（一口）

編集後記

総裁、会長及び理事長による鼎談において、伊藤猊下から「平和とは、いのちの大切さに尽きる」とのお言葉を頂戴した。戦争のみならず、貧困、差別など人々が願う穏やかな暮らしを阻害するすべての諸問題に通底するのは、一人ひとりの「いのちの大切さ」への欠如と言って過言ではないだろう。まさに平和とは、その自覚と内省から生まれるものだと考える。猊下の短いが鋭いこのご教示を受け、私たちは宗祖法然上人の開宗の御心を旨として「平和」への取り組みをなお一層力強く継続していかなければならないと思う。

宗祖のお念仏のみ教えは即ち平和への取り組みであり、この実践は『お念佛からはじまる幸せ』と相俟って、刀を棄て念珠を持たれた宗祖の意に適うものである。このことをしっかりと踏まえ、着実な歩みを進めたい。

本年は卯歳である。平和課題に対して、一人ひとりが歓喜躍動して取り組む年にしたい。

本宗の平和事業は、本協会が担当させていただいていることから、今後も宗門寺院の皆様や関係者各位のご支援とご協力を切にお願いするとともに、ご意見などがあれば、事務センター宛にお寄せいただきたい。

文末ながら「Dana」４０号の編集に格別のご協力をいただいた渡部裕明氏（元産経新聞社論説委員）に深甚の謝意を表したい。　（山川）

浄土宗平和協会役員・スタッフ

総　裁	伊藤 唯眞	理事長	廣瀬 卓爾
副総裁	小澤 憲珠	副理事長	深谷 雅子
副総裁	福原 隆善	副理事長	山北 光彦
会　長	川中 光教		
副会長	宮林 雄彦		
理　事	東海林 良昌	事務局長	山川 正道
理　事	齋藤 隆尚	事務局次長	宮田 典彦
理　事	小口 秀孝	事務局員	小泉 範幸
理　事	野上 智徳	事務局員	岩井 正道
理　事	山川 正道	事務局員	霜村 真康
理　事	加用 雅信	事務局員	田中 堅信
理　事	永江 憲昭		

寺院で回覧してお読みください。

浄土宗平和協会 Jodo Shu Peace Association JPA
編集・発行：浄土宗平和協会事務センター
〒622-0003 京都府南丹市園部町新町火打谷５教傳寺内
TEL : 0771-62-0442 FAX : 0771-62-1620